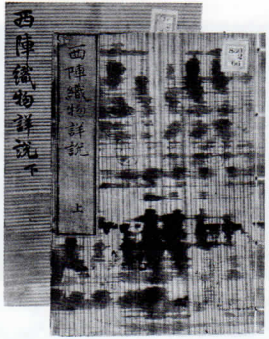
西陣明治の群像①

思想家竹内作兵衛

謎に満ちた人物ほど、物書きとして食指をそそられるものはない。竹内作兵衛もそうした一人である。

田中緑江編『明治文化と明石博高翁』によれば「西陣物産会社の世話役竹内作兵衛という機業家が、フランスにジャカードとよぶ巧妙な紋織機のあることを知り、西陣のために購入しようと勧業場に申し出た」とある。明治五年のころである。わずか三行あまりに、西陣織を今日あらしめているジャカードの移入に注いだ彼のただならぬ熱意がほと走っている。彼はまた同じころ、西陣古来の染織技術を精細に記述した『西陣織物詳説』の編纂を終えている。たぐいまれな同書はウィーン万国博出品の西陣織に添付するために編まれたものである。その間わずか六カ月。学識豊かな人物であったにせよ、すざまじいまでの集中力である。



それにしても西洋の新技術移入を目前にして、なぜ空引機を中心とする古来技術の集大成に情熱を注いだのだろう。政府の命を受けたにせよである。この不可思議さのなかにこそ、竹内作兵衛は血肉ある人間として、眼前に現われてくる。

ジャカードは空引機に較べて約四倍も能率の上がる自動紋織機であった。作兵衛はこの織機を知った時、すでにこれこそが西陣の明日を拓くであろうと確信したのではあるまいか。自動化された最新鋭機を移入するためには、古来の技術との差異を定かに見きわめておかねばならない。『西陣織物詳説』編纂はそのための営為であったと考える。

変革というものは、まず思想家が現れて、その志を引継ぐ技術者によって具体化されてゆく。それはとほうもなく遠い道のりである。竹内作兵衛を躊躇することなく、思想家として想定する。

織の街西陣の今日、それは竹内作兵衛の描いた「新生西陣」という紋意匠図にもとずいて、いく人もの名匠（技術者）が、血みどろになって結実させた一幅の錦である。

（福本武久）